

ふるさと御所 文化財探訪

其の三十三

古墳時代〈21〉
葛城氏の盛衰
(10)

葛城氏と

河内政権③

文化財課

☎60-1608

では河内政権の存在を前提に考えていきます。奈良市の佐紀盾列古墳群は前期から引き続き大形古墳を築造し続けています。おそらく河内政権は、佐紀盾列古墳群の被葬者に連なる女性と婚姻関係を結ぶことにより、その正統性を借りて成立したものと類推できます。したがってある時期からの河内政権にとっては、佐紀盾列古墳群の勢力は目の上のたんこぶのような存在となったとみられます。

● 図1では中期中小規模墳（5世紀代）の分布を示しています。盆地

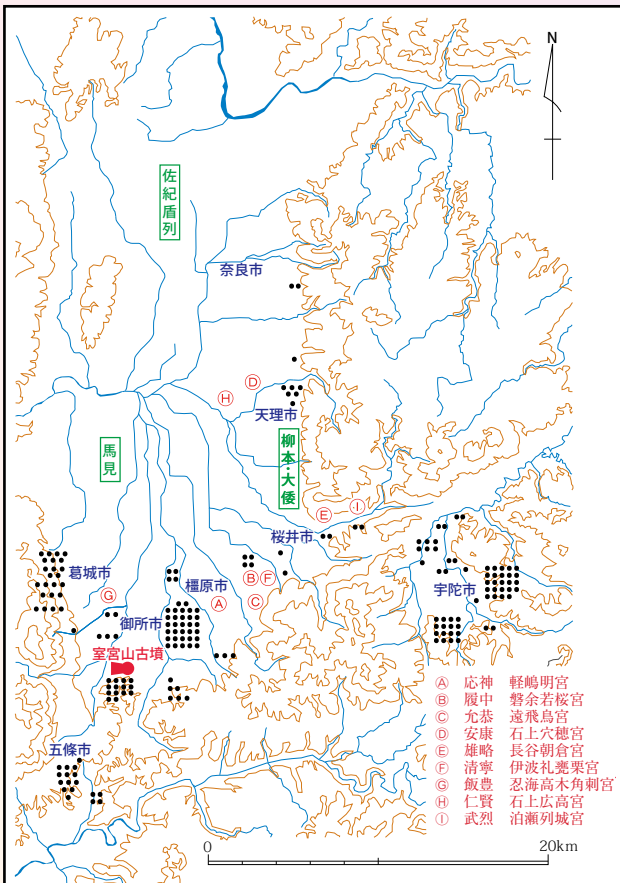


図1 奈良県内における中期中小規模墳と河内政権期の王宮

南部の御所市や橿原市周辺のほか、五條市・宇陀市に集中して分布することが分かります。これらの地域に共通する特徴は、前代の前期古墳の分布が稀薄であることです。つまり河内政権は、そうした地域を選んで自らの息のかかった勢力を意図的に配置しているのです。北には城陽市の久津川古墳群、西には馬見古墳群、東には伊賀上野市の美旗古墳群があり、いずれも河内政権の息のかかった勢力です。そして盆地西南部の新興の中期中小規模墳の被葬者集団の要こそが室宮山古墳、そして葛城氏であったと考えられます。以上により佐紀盾列古墳群の被葬者集団に対する包囲網が完成するわけですが、実はこの時期に大和に置かれた大王

の王宮①も右記の中期中小規模墳の分布と重複するので、大王自らもたびたび牽制行動をとっていたと考えられます。これで行くやうく平成22年8月号の命題に対する解答を用意できました。つまり突然に室宮山古墳が出現する背景として想定できるのは、河内政権による極めて濃厚な政治的意図にほかならず、それは前期以来の勢力の稀薄な盆地西南部のうちの、とりわけその傾向の強い南葛城の地に打ち込まれた、大和の旧来の勢力(佐紀盾列古墳群)に対する、巨大な楔ともいえるべきものとみられます。

さて、佐紀盾列古墳群では5世紀後葉近くの築造に



図2 埼玉稲荷山古墳出土辛亥銘金象嵌鉄剣
(転載許可：埼玉県立さきたま史跡の博物館)

かかる磐之媛陵古墳を最後に大形墳の築造は途絶えます。埼玉稲荷山古墳の辛亥銘鉄剣(図2)に獲加多支鹵大王と諱が刻まれたことで知られる雄略大王は、記紀では皇族をはじめとする多くの敵対勢力を殺害した専制君主としても有名です。したがってわたしは、雄略大王こそが、ついに佐紀盾列古墳群を途絶えさせるに至った張本人ではないかと疑っています。そして図1の⑥は雄略大王の長谷朝倉宮で、谷筋の奥まったところにあり、防御に優れた立地です。何のための防御であったのかを考えると、この王宮は佐紀盾列古墳群の勢力を打ち破るための前線基地として機能した、とするのが妥当であろうと思っています。

【参考文献】

▽拙著「古墳時代の王権と軍事」、2006年、学生社

▽拙稿「河内政権肯定論―王宮の所在とその性格―」、2009年

(文責 藤田和尊)